

# 学生が行く！ 土木のお仕事

相沢 圭俊 学生編集委員  
篠崎 真澄 学生編集委員

第6回 【横浜市】いたち川（プロジェクト編）

## 都市河川の自然復元をひもとく！

〔取材協力者〕吉村伸一氏（株）吉村伸一流域計画室 代表取締役

土木技術者の活躍の場は、構造物だけに留まらない。自然環境を守り、時にはつくり出すことも土木のお仕事だ。今回の取材先は、かつてのドブ川を緑豊かな川に蘇らせ、多自然川づくり（※コラム参照）の先駆けとなった「いたち川」。2011年土木学会デザイン賞を受賞したこの事業の背景を、立役者である吉村伸一氏に伺った。

### 賛同者0名の自然復元事業

いたち川は、神奈川県横浜市の西部を流れる全長約7・8kmの二級河川。住宅地や学校のすぐ脇を流れ、地域の生活と隣り合っている川だ。今でこそ魚が泳ぎ、野鳥が飛来する自然豊かな川だが、30年前までは生き物もいないドブ川であった（写真1、2）。

このドブ川が変わるきっかけとなったのは、1981年に打ち出された横浜市の新しい総合計画だ。これまでの治水一辺倒の整備から「河川環境整備事業」が新しくスタート。いたち川の自然復元事業が行われること

なる。

しかし、現在では多くが受け入れられている自然復元事業も、当時は市民の理解が得られなかった。それは、いたち川が大雨の時にたびたび洪水の被害をもたらす川であったためだ。そのため、被害を防ぐ目的で川幅を広げ護岸はコンクリートで固め、川をまっすぐにするという典型的な都市河川として整備されていた。また当時の常識では、川は「汚い水を早く流すためのもの」であり、川に自然を取り戻すという考えはほとんどなかった。「余計なことをして、また洪水になったらどうする！」と地域住民から反対の

声が上がリ、1982年に実施した事業説明会では賛同者は0名。町内会長さんの「そんなに悪いことではないと思いますがみなさんどうですか？」という口添えで事業は実施できたものの、多くの地元住民からNOを突きつけられた状態からの事業実施となった。

### 本来の姿を取り戻す

1982年から始まった自然復元事業だが、まず初めに取り組んだのは排水路のような姿の川に「川らしさを取り戻す



写真1 かつてのいたち川(1981年新橋上流、写真提供:吉村伸一)



写真2 自然復元後のいたち川(1992年新橋上流、写真提供:吉村伸一)

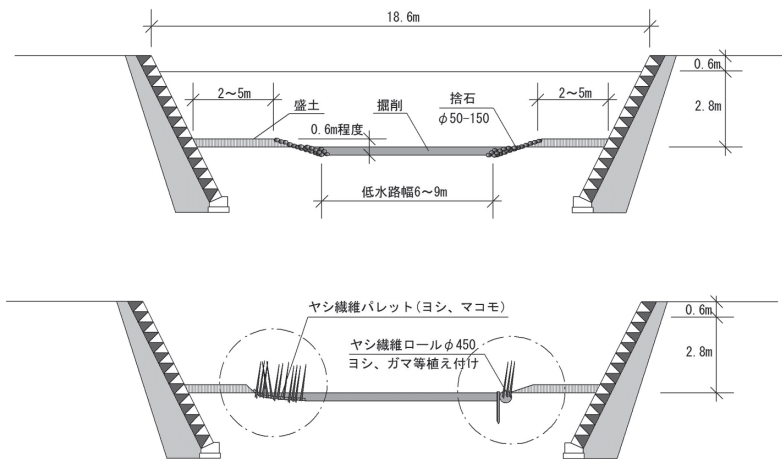


図1 低水路整備事業の断面図 (提供: 吉村伸一(一部改変))

す」ことであった。平らになった川底の一部を掘り下げて<sup>みみずし</sup>滲筋を形成し両側に盛土する。当時は水際部を護岸で固めるのが常識であったが、それをあえてしなかった。川の働きで形が変化することを許容するという考えからだ。

施工から10年経って形の変化(盛土の流出)が目立つようになる。変化を許容しつつ安定させるにはどうした

らしいか。そこで採用したのが当時ドイッではすでに行われていた、ヤシ繊維を用いた植生工法である。ヨシなどの水生植物をヤシ繊維ロールやマットに植え付けて流されないように固定する工法だ(図1)。植物の生育が早く、成功したかのように思ったが、5年ほど経ってロールのヤシ繊維が流出して植物自体が浮き上がるなどの失敗もあった。その後ヤシ繊維マットを川底に設置して定着する面積を増やす工夫をし、見事な緑を取り戻した。自然の滲筋ができたことによって、直線的だった川の流れにも変化が生じ、流速の遅い茂みの部分には小魚の隠れ場所ができ、その小魚を狙って鳥が飛来するようになる。こうして、いたち川は徐々に本来の姿を取り戻していった。

もう一つは、川に親しんでもらう仕掛けだ。柵に囲まれた川に、川辺まで降りられる階段を設置する。この階段は、河川管理用通路に降りるためのものだが、施錠せずに誰でも川辺に降りていけるようにした。その狙い通りに近所の子どもたちは川へ降りて遊び始めるようになる。当初、大人たちからは子どもが危険な川遊びをするよ

## COLUMN

### 多自然川づくりを支える制度の発展

い たち川の自然復元事業は1982年から実施されており、当時は「多自然川づくり」の概念すらなかった時代であった。この多自然川づくり(初めは「多自然型川づくり」と呼ばれていた)とは1990年から始まった河川整備事業のことで、河川や周辺に生息している生物に配慮し、美しい自然景観を保全または創出することを目的としている。また、1997年からは河川法の改正によって住民参加も盛り込まれることとなった。

しかし、2006年には多自然型川づくりレビュー委員会において、「場所毎の自然環境の特性への考慮を欠いた改修を進めたり、他の施工箇所の工法をまねるだけの画一的で安易な川づくりも多々見られる」との指摘があり、そこで新たに「多自然川づくり」が提唱される。従来の自然環境への配慮に加え、「地域の暮らしや歴史・文化との調和」も重視されるようになった。

うになったと苦情が寄せられるようになったが、「川で遊ぶ」子どもたちの姿は、ドブ川が「川」として認知される第一歩となった。

### 「川は生活の一部です」

「川は生活の一部です」。これは、2011年土木学会デザイン賞に応募した時のキャッチコピーだ。この言葉の通り、今のいたち川は地域住民の生活の一部となっている。取材中にも川沿いを散歩する人びとに出会ったが、多くはいたち川を見ながら、せせらぎの音に耳を傾けながら歩いていた。また、水辺愛護会が発足し、地元

住民の手による清掃活動も行われるようになった。

環境が人をつくると言われるが、その環境をつくるのは土木技術者でもある。「川」という身近な環境を自然豊かにしたこの事業は、自然環境だけでなく多くの人びとの行動・意識を変えるきっかけとなった。人をつくる環境の創造、これも土木の役割の一つだと思った。

### 予告

次回後編は、いたち川整備事業に携わった吉村伸一氏の人生観を明らかにする。地元からの大反対にあった逆風の中で事業をやり遂げた信念や、吉村氏の考える「自然」について伺った。